

かぐらおが

第 36 号

昭和58年 5月 1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 第5学年学生 朝倉利久)

春山スキー

内 容

| | |
|----------------------------|--------------------------|
| 回想：一冊の本……………笹森 秀雄… 2 | 武道場竣工…………… 6 |
| 夜の医療……………高橋 三郎… 3 | トレーニングコーナーの開設について…………… 6 |
| 第5回卒業式……………4 | 河原林教授退官記念最終講義…………… 7 |
| 本学大学院医学研究科修了者6名出る。ノ…………… 4 | 体育施設使用規程の改正について…………… 7 |
| 昭和58年度入学式…………… 4 | 研究室紹介……………新崎 裕… 7 |
| 新入生研修…………… 5 | 課外活動短信…………… 8 |
| 昭和58年度の主な年間行事…………… 5 | 窓 外……………宮岸 勉… 8 |
| 昭和58年度運営組織…………… 5 | |



回想：一冊の本

笹森秀雄

丁度去年のいまごろであったと思うが、私のもとに、東京の学芸図書株式会社という書店から、一冊の本が送られてきた。開いてみると、中から二通の挨拶状が出てきた。一通は書店からのもので、「このたび、五十嵐三郎先生未亡人様からの御用命により、小社刊行の五十嵐三郎国語文集を一冊御送本申し上げますので、御査収ください」というものであった。また他の一通は、先生未亡人寿子様からのもので、そこには、「謹んで申し上げます。先頃、夫 三郎がみまかりましたおりは、早速にお懇ろな御弔詞とお手厚い御供物を賜りまして、まことにありがとうございました。心からあつくお礼申し上げます。本日、おかげさまで、滞りなく、高岳院俊剛明毅居士、中陰の法要を相済せました。つきましては、たまたま出来上りました三郎の著書を、供養の印までに、出版元よりお届けいたしますので、お収めくださいますようお願い申し上げます。拙いものながらお目通しいただければ、故人もさぞ喜ぶことと存じます。まずは、お礼がたがた御挨拶まで、右のとおりでございます。かしこ」と認められてあった。

五十嵐三郎先生からの献本——それは、たとえ供養の印としても、私には到底考えられぬことであった。というのには、先生と私とは専門分野が異なり、また年齢もかなり離れていたもので、決して親しい間柄とはいえなかったからである。それだけに、先生の著書を受取ったときは、驚きもし、またうれしくもあった。いま、この一冊の本を手にするたびに、過去における私と先生の結びつきを回想し、心から感謝せずにはいられないのである。

私が友人から、「あの方が、国語学とくに文法と方言の研究で名高い五十嵐先生だよ」と教わったのは、たしか北大文学部三年の時だったと思う。後で聞いた話だが、その時先生は、藤女子大学から北大文学部に移られて間もないころだったという。私が大学を了え、助手になってからは、入試その他の関係でたびたび先生にお逢いする機会があったが、しかしその時は、ただ軽い挨拶で過すことが多かった。

私が先生と親しくお話をするようになったのは、教授会のメンバーとなり、数カ月後のある日、先輩の和田謙吾さんと本田錦一郎さんが、私を先生に紹介して下さった時からである。たしかその時、両先輩とも、「この男は、道南の奥尻の出身ですから、先生の方言の研究には大いに役立つと思いますよ」といったことを記憶している。それ以後、先生は教授会や各種会議の折、たびた

び私の横に席をとられ、「君、奥尻では〇〇のことを何というかね」といった調子でよく尋ねられたものである。先生との会話のなかで今でもはっきりと目に浮かぶのは、ある日私が、「方言においても、英語の child と children の区別と全く同じ用法があるのを、ご存知ですか」ということを申しあげた時の、その驚きようと思ひようである。奥尻では、今でもそうだと思うが、子供の呼び方に、「ワラシ」と「ワラシヤド」の二種がある。前者は英語の child、後者は children に当るものである。私には何の変哲もない言葉であるが、先生には珍しい方言採集だったのだらうと思う。

先生の『国語文集』の第二部は、主として方言に関する論文を集められたものであるが、その多くは、「共通語化の過程」に関する研究であり、そこでは、次のようなことが調査の目標であったようである。

- ①第一世から第三世へ、どこで共通語化が一段と進むか（方言色がなくなるか）
- ②言語の音韻・アクセント・文法・語彙のどの面から共通語化が進むか
- ③できあがりつつある「北海道共通語」は、東京語とどの点で違うか。内地のどの方言の要素を多く持っているか
- ④共通語化を進める要因は内地の場合と同じか違うか私への方言採集も、このような構想のなかで行なわれていたのだと思うと、その積極的な研究態度に、唯々頭の下がる思いがするのみである。

ともあれ先生と私の結びつきは、方言が一つの契機となったものである。先生には昭和47年から本学の入試に御協力をいただくことになったが、思えば人の結びつきというものは不思議なものである。『五十嵐三郎国語文集』を手にするたびに、おそらく私は決して先生との結びつきを確認し、そして最後に、「どうも有難うございました」と答えずにはおかないであろうと思う。研究分野の全く異なる一書ではあるが、私にとっては思い出せない一書である。

(社会学 教授)





夜の医療

高橋 三郎

英雄さん(仮名)は昭和49年当時63歳で、そろそろ村のお年寄の仲間に入る世代であった。若いころから村一番の“大変な働きもの”として知られ、早朝から夜遅くまで妻とともに長年農業に従事していた。昭和44年58歳時に健康診断で高血圧を指摘され、以来ときに近くの診療所に通院していたが、特別の自覚症状もなく経過していた。

昭和49年11月のある朝、いつもと違い起きてこないため、朝食の準備中の妻が英雄さんのところにいってみると、ふとんのなかで“困った、困った”と連発しながら、妻を正しく認識できず、意識も多少もうろうとしているようにみえた。いつもの様子とはあまりにも違う主人の言動をみた妻は、同居して共に農業をつづけていた息子夫婦にその事情を説明して、近医に入院させざるを得なかった。妻の観察によると、入院後数日でもうろうとした状態は軽快し、妻や息子達をほぼ正しく認識できるようになったかにみえたが、まとまった会話はできず、また少しこみ入った内容の質問は理解できていないようであった。そのため12月中旬、近郊の市立総合病院内科に転院したが、日中はウトウトとベッド上でおとなしくすごしながら、夜間になると些細なことで興奮気味となり、容易に泣きだす状態であった。

転院3日目の夜9時すぎ、消灯時間となり病室内が暗くなるころ突然ベッドから起き出し、断片的な大声で叫びながら右下肢を多少ひきずって病室内や廊下を歩きはじめ、それを制止しようとする看護婦やつきそいの妻を無視する行動が出現してきた。まもなく当直医からの要請で精神科医が往診にかけつけたとき、患者は前傾姿勢で廊下にある洗面台の水道の蛇口を左手でおさえながら暗がりの中で、“……これ、……これ……”と何かをしきりに訴えたいような表情を示していた。真夜中が近づいていた時刻のため、とりあえず自室のベッドまで患者を誘導し、しばらく妻や看護職員とともにその場において、室内灯を通常よりも幾分明るめにし、“明朝またゆっくりとお話しましょう”と約束して、その夜は別れた。

翌日精神科病棟へ転科後は、前夜のような異常言動は漸次軽減したが、些細なことで顔面を真赤にして怒声を盛んに発しつづけ、周囲の人達には何を言っているのか良くわからない状態であった。しかしその後、家族の面会を頻回にしてもらうころから、次第に温和な態度をとることが多くなり、“英雄さん、元気ですか?”などと声をかけると、機嫌よさそうに、ただ“アハハハ……”と笑うように変化してきた。さらにまとまった言葉もボツリ

ボツリであるようになり、質問に対しても相応した返答をすることが可能となった。その後外泊をくり返す間に全体的な安定化がみられ、50年10月退院して家庭にもどった。その後筆者が経過観察をつづけていた3年余の間、特別の異常徴候を示すこともなく、家庭での日常生活や散歩、つりなどを楽しんでいた。

長々と一患者のことを書きつづけてきたが、それは以下のような理由があったからである。すなわち、その少し前まで勤務していた大学病院では、ある程度選択されてきた患者の診療が多かったが、市立総合病院では地域に密着した多彩な患者にめぐりあい、その中でも高齢者が多数であったことである。そこでは、時に報道されはじめていたわが国の急速な高齢化社会への一端を身をもって体験することができた。既知のように、高齢者はただ一つだけの疾患を有していることはむしろまれで、その結果として複数科の診療が必要となることはしばしばである。ここでとくに重要と思われた点は、患者を中心として各科の医師間のスムーズな意志疎通は勿論のこと、看護職員や理学および作業療法士など患者をとりまくすべての人達との協力関係の必要性であった。

前記症例の診療を契機として、注意深く観察していくと類似の症状を呈する高齢者が多数存在することが確認できた。彼らの多くは日中比較のおだやかに、あるいは傾眠がちにすごしながら、周囲が暗く静かになるころから異常な言動を呈することが多かった。当時から不思議に感じていたことの一つは、これまでの大部分の医学医療が日中の問題を中心になされ、特別の睡眠研究を別にすれば、一日の約半分をしめる夜の医学医療があまり重視されていないように思われることであった。ラボラトリー全盛の昨今、夜間に言動のまとまりを欠く病者のそばにいて、じっくりと話をきき、暖かいまなざしで接する治療的態度がとりにくくなっているのかもしれない。

ここまで書いてみると、数日前に入院した67歳のパーキンソン病の男性の様子がおかしいと病棟から電話が入った。前日夕から少量の抗バ剤を服用しはじめたが、夜11時すぎから周囲を不安そうに眺め、ウロウロと病棟内を歩きはじめたとのことである。(58年2月9日夜 記)

(精神医学講座 助教授)

第 5 回 卒 業 式

3月25日(金)午前10時30分から、本学体育館において第5回卒業証書授与式が挙行された。父兄・教職員の祝福の中で、卒業生99名(内女子学生11名)は、1人1人学長から卒業証書を手渡され、感慨無量の面持ちであった。

式終了後は、本学学生食堂で祝賀会が和やかな雰囲気のうちに行われ、卒業生にとって大学生活最後の1日が終わった。

(学生課)



本学大学院医学研究科修了者6名出る!

去る3月25日(金)午前9時45分から本学第1会議室において本学で初めて医学研究科を修了した6名に対し医学博士の学位が授与された。

| 氏名 | 専攻 | 学位論文題目 |
|-------|----------------------|---|
| 斎藤 達也 | 生体情報調節系 代謝・内分泌学部門 | Caerulein および secretin 投与後の各種酵素の分泌反応と血中逸脱に関する研究 |
| 東 寛 | 生体防御機構系 病原微生物学部門 | ConA によるヒト末梢リン球増殖反応に及ぼす抗ヒト Ia 様抗原単クローン抗体の影響に関する研究 |
| 安藤 政克 | 細胞・器官系 腫瘍学部門 | 唾液腺筋上皮細胞の再生に関する実験的研究 —ラット 下腺自家移植法を用いて— |
| 笠茂 光範 | 細胞・器官系 発生学部門 | Prostaglandin F の動態からみた着床機構に関する基礎的研究 |
| 千石 一雄 | 細胞・器官系 発生学部門 | ヒト卵胞発育、排卵現象に関する臨床的研究 —超音波断層法と内分泌学的相関— |
| 林 博章 | 細胞・器官系 発生学部門 | 培養絨毛癌細胞株に対する Methotrexate, Actinomycin D の抗腫瘍効果に関する研究 |

(学生課)



昭和58年度入学式

昭和58年度入学式は、4月8日(金)午前10時から、本学体育館において、挙行された。今年度新しく本学の学生となった120名(内女子学生16名)はさまざまな期待を胸に秘め式に参列し、学長の式辞、又新入生を代表して青山敬君が「学則その他の規程を遵守するとともに、学生としての本分に従って勉学に励み、成業を期すことを誓います。」と入学誓約書を読み上げた。式終了後は、講義室において学年担当、図書課、学生課からのガイダンス、第1内科坂井助教授「学生生活と健康管理について」の講演および学生代表からの挨拶を受け、大学生活への第1歩を踏み出した。

(学生課)



昭和58年度入学者名簿

昭和58年度の主な年間行事

今年度の主な年間行事は次のとおりです。

| | | |
|-----|--------|--------------------------|
| 4月 | 8日 | 第11回入学式 |
| | 18~19日 | 新入生研修(第1回目) |
| 6月 | 15日 | 開学10周年記念式典 |
| | 16~19日 | 第9回医大祭 |
| 9月 | 7日 | 体育大会 |
| | 21日 | 解剖体慰霊式 |
| 10月 | 7日 | 新入生研修(第2回目、水・土・ 日は除く) |
| 11月 | 15日 | |
| 12月 | | スキー教室 |
| 3月 | 24日 | 第6回卒業式 |

(学生課)

昭和58年度運営組織

(教務委員会委員)

| | | | |
|------|------------|-------|--|
| 委員長 | 小野寺壮吉(副学長) | | |
| 副委員長 | 星野了介(図書館長) | | |
| 委員 | 笹森 秀雄 | 内田 倬喜 | |
| | 丸子 基夫 | 藤沢 仁 | |
| | 片桐 一 | 石橋 宏 | |
| | 並木 正義 | 清水 哲也 | |
| | 天羽 一夫 | | |

(厚生補導委員会委員)

| | | | |
|------|------------|-------|--|
| 委員長 | 小野寺壮吉(副学長) | | |
| 副委員長 | 岩瀬 次郎 | | |
| 委員 | 美甘 和哉 | 岡田 雅勝 | |
| | 松嶋 少二 | 黒島 晨汎 | |
| | 土井 陸雄 | 宮岸 勉 | |
| | 坂井 英一 | 関口 定美 | |

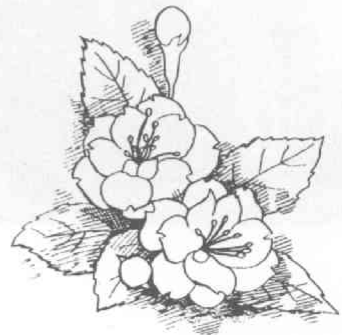
(学生課)

新入生研修

今年度第1回目の新入生研修は4月18日(月)・19日(火)の両日午後5時から午後7時まで本学の第1セミナー室・第2セミナー室・和室・一般教育会議室で行われた。

参加者相互のコミュニケーションを図ることを目的として、教官と共に自己紹介及び懇談会を通じて、親睦を深めていた。

(学生課)

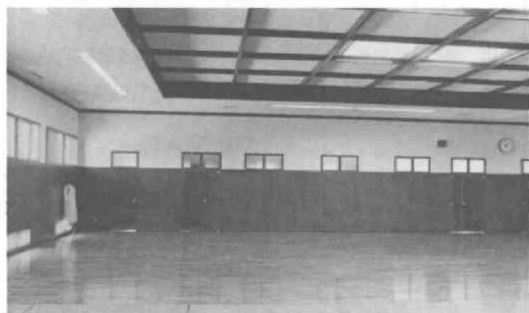


武道場竣工

数年来の念願であった武道場が、3月竣工しました。武道場は体育館と渡り廊下で結ばれており、建物は鉄骨鉄筋コンクリート造り平屋建、延面積424m²(本屋391m² 渡り廊下33m²)です。

今まで武道場がないため、十分な活動ができなかった各武道系クラブはこの完成によってより充実した活動、各大会での活躍等効果的な利用が期待されます。

(学生課)



トレーニングコーナーの開設について

このたび武道場の完成にともない、体育館の2階に学生・職員を対象に健康・体力づくり及びスポーツをする人の基礎体力増強を図る目的で、トレーニングコーナーを開設しました。このコーナーにはコンビネーショントレーナー(14種の運動ができる器具)を中心に各種トレーニング器具11点を用意しましたので、自分の体力や運動量を充分考え、逆効果にならないような適切なプログラムを自分で作り、大いに利用して下さい。

また、このコーナーは定められた時間内であれば、いつでも自由に使用できますが、使用するときは必ず「トレーニング器具の使用法」(各器具上にパネルで使用方法等が書いてある。)を参照して下さい。



トレーニングを始める前の心構え

トレーニングを始める前に次のことを守り、けがや事故を起こさないよう充分注意して下さい。

- (1) トレシャツ、トレパン、屋内運動靴等トレーニングに適した服装をすること。
- (2) 初めから急激な運動をしないで、準備運動を充分行うこと。
- (3) 器具の使用については、各器具にパネルにより使用説明がなされているので説明の順序に従い誤った使用をしないこと。
- (4) 自己の運動能力をまず充分わきまえ、トレーニングによる運動量や強度は徐々に高めるよう心掛けること。
- (5) トレーニング終了後は、必ずクールダウン(整理運動)を行うこと。

トレーニングコーナー使用上の注意

トレーニングコーナーを使用する場合、次のことを守って下さい。

- (1) 使用できる時間 午前8時30分から午後7時まで。
- (2) 火災防止に努め、コーナーでの喫煙はしないこと。
- (3) 器具等は大切に取扱い、もし破損等が生じた場合は学生課学生係へ必ず連絡すること。
- (4) 器具利用者相互間の事故に充分注意すること。
- (5) 使用後は、清掃、消灯等整理整頓すること。

(学生課)

河原林教授退官記念最終講義

3月10日(休)午後3時から臨床第3講義室において衛生学講座 河原林教授の退官記念最終講義が行われた。

小野寺副学長より河原林教授の略歴等の紹介があり、約1時間にわたって「室内空気の衛生について」の講義が行われた。

次いで学長の送辞・記念品花束贈呈があり、河原林教授は聴講者からの拍手に送られ退室された。

(学生課)



体育施設使用規程の改正について

旭川医科大学体育施設使用規程の一部を改正する規程(昭和58年3月9日旭医大達第3号)

この規程は、武道場の設置に伴い、所要の改正を行ったものである。昭和58年4月1日から施行。

旭川医科大学体育施設使用規程(昭和57年旭医大達第1号)の1部を次のように改正する。

第2条中第5号を第6号とし、第2号から第4号までを1号ずつ繰り下げ、第1号の次に次の1号を加える。

2 武道場

第6条第1項中「弓道場」を「武道場及び弓道場」に改める。

附 則

この規程は、昭和58年4月1日から施行する。

改正理由

武道場の設置に伴い、所要の改正を行うものである。



研究室紹介

■ 麻酔学講座 ■

新崎 裕一

麻酔学講座は、小川秀道教授の就任により、昭和51年4月に創設されました。教授は当時、日本麻酔学会理事、北海道麻酔学会々長、あるいは北海道臨床麻酔懇話会々長など数多くの要職、激務の中、教室の発展に日夜全精力を傾け、臨床、研究、学生教育に奔走され現在に至っています。

手術部における麻酔の業務は、昭和51年11月、附属病院の開院と共にスタートし、同時に「手術患者の激しい痛みをコントロール出来る麻酔科医が非手術患者の痛みをコントロール出来ない筈はない。麻酔科医こそ、疼痛管理にもっとも熱心な、そして貢献できる医師でなければならない。」との考えのもとに疼痛診療部門を開設、疼痛外来診療のほかに入院治療も可能とし、ベッド数も当初から12床を確保し常に100%近い稼働率で回転させてきました。

今春からの手術部での麻酔業務は、札幌区大から3名の強力な麻酔科医の補強により、従来から受け入れてきた各科からの研修医の指導のほか臨床研究面でも大にその力量が発揮されようとしています。

他方現在すでに新しい特殊診療棟も完成し、集中治療室をはじめ、他の医療の分野でも活躍が期待されそうです。実際には、昭和53年10月から、小規模ながら院内に集中治療室と透析治療室を付設し、これらの分野における活動に着手していましたが、今後は更にその活動の範囲も広がっていくことになりましょう。

研究面では、臨床医学講座としての性格から、即実際の臨床に役立つ研究を目指し、次の各項目にわたり意欲的に推し進めています。麻酔薬ならびに関連薬物の循環動態とくに腎機能に及ぼす影響に関する研究、血液浄化法に関する基礎的ならびに臨床的研究、生体内に投与された各種薬物の代謝、消長に関する研究など、常勤の研究スタッフのほか道内外からの研究生が7名、それぞれ与えられたテーマについて地道にとり組んでいます。教室の記念会や忘年会等ではこういった人達も加えていつも大賑わいで、この辺にも教授の人柄と今後の教室への期待が偲べれます。その他疼痛治療に関する研究、特殊状態下の麻酔管理、呼吸管理法、各種モニタリングに関する研究等、臨床に直結した応用医学研究面にも精力的にとり組み、殺人的な多忙の合い間をぬってこれらの研究成果を国内、外に積極的に発表してきました。今年度もすでに9月のソウルでの学会と、明年1月マニラでの世界麻酔学会に小川教授らの出席発表が予定されています。

以上のような多忙な教室の現況ですが麻酔学はあたたかも麻酔の習慣性のように暫くやっているとやめられなくなる魅力があります。医師過剰時代の到来が囁かれる中で麻酔科医の将来性は無限に広がっています。現在のところは小世帯ながらごく近い将来の飛躍を合言葉に研究室は粘り強い若人の入局を鶴首して待っています。

(麻酔学講座 講師 <非常勤>)

課外活動短信

第25回東日本医科学生総合体育大会（冬季スキー部門）

総合 男子（優勝） 女子（優勝） 3/23～3/25

（男子）

（女子）

大回転2位 岸（2年） 大回転2位 浜口（5年）

〃 3位 山賀（3年） 回転2位 浜口（5年）

回転2位 岸（2年） 3km 1位 赤平（4年）

8km 1位 石原（3年） 5km 2位 赤平（4年）

15km 1位 石原（3年） 〃 3位 池田（5年）

●ノルディックリレーAチーム 2位

（船越・石原・西川・石井）1時間12分38秒9



窓外



宮岸 勉

思いつくままに——その4

講演会

近ごろのように、覚醒剤中毒者の犯罪やノイローゼ患者の自殺、中学生の問題行動などが度々報道される世の中ともなれば、われわれ精神科医にも精神衛生についての講演会や研修会の依頼が増えてくる。現代社会とストレス、自殺を防ぐために、うつ病の話、職場における精神衛生、脳の老化と心の変化、女性のノイローゼ、など要望されるテーマはさまざまであり、私は人前で話をすることが得手ではないが、依頼があれば旭川市内はもちろん、稚内市や阿寒町まで出かけたりもする。

対象は一般市民、PTAの会員、保健婦、栄養士、企業の健康管理担当者などであったり、高校生達であったり、年令も職業もまちまちである。

私は、時間の許す限り講演の依頼を引き受けようと思うが、それというのも、精神衛生の基礎的な事から出来るだけ多くの方々に理解してもらい、精神疾患の予防対策や治療のためには患者の周囲の人達の理解と協力が必要不可欠であること、精神科治療法が現在どの程度まで進歩しているかということ、などを知って欲しいと願うからである。

さて、私の拙い話を聴きにきて下さる方々の様子を見ると、大学で講義を聴く学生諸君の場合と同じく2通りのタイプがある。初めから終りまで克明にメモをと

るタイプと、私の顔をじっと見つめながら聴き入るタイプである。どちらのタイプがどうというつもりは毛頭ない。人それぞれに聴き方や理解の仕方があるのは当然であろう。とにかく、熱心に聴いて下さるのは、話をする側にとっては張り合いのあることである。

しかし、時折思うことは、このような講演会に関心をもち出席される方々は、実はその必要がない方々なのではないかということである。たとえば、子どもの自殺の話にしても、この方々は、平素からその悲しむべき事態を憂い、わが子がそうあってはならないという深い思慮と関心をもっておられるからこそ、悪天候の中でもわざわざ会場まで足を運ばれるのであり、このような両親のもとでは、子どもの問題行動などはおこりようがないといえよう。気がかりなのは、講演会や研修会などと全く無縁の父親群、母親群の存在である。中学生のわが子が理由も明らかでないままに外泊をくり返し、家出をし、シンナーを吸い、果ては暴力沙汰に及ぶ等々のことがあっても無関心、放任、うるたえを示すことしか知らぬ親達こそ、あらゆる機会をとらえてわが子との接し方を学んで欲しいのであるが、現実にはそれを望むべくもない。だからこそ、公共の場で見かける親子の振る舞いから、この親に育てられる子は将来どんな大人になるのだろうかとか肌寒い思いをすることにもなる。

それにしても、講演会や研修会にはそれなりに意義があることを認めるのにやぶさかではないので、私自身も聴きに出かけるし、依頼があり聴いて下さる方があれば話し手としても出かけようと思う。

講演会后、数日を経ずして礼状をいただいたり、感想文を届けて下さったりすることもあり、それが私の大きな収穫となることも多い。また、講演の準備それ自体がさまざまな意味で自分の勉強にもなっているのである。

（精神医学講座 教授）